

非核平和友好都市宣言推進事業

平成29年度 広島平和記念式典参加

# 感想文集



「二度と同じような悲劇が起こらないように」との願いがこめられている原爆ドーム

上 越 市

## 発行に当たって

上越市は、戦後 50 年の節目に当たる平成 7 年に非核平和友好都市を宣言し、豊かな自然と長い歴史に培われた美しい郷土を末永く守るため、核兵器を廃絶し、世界の恒久平和に向けてたゆみない努力を続けることを誓いました。

以来、この宣言の趣旨を普及・啓発するため、毎年 8 月 6 日に行われる広島平和記念式典への参加のほか、平和展の開催や戦争体験談集の発行など様々な事業に取り組んでいます。

今年度も市内中学校の協力のもと、中学生 24 人が広島平和記念式典に参列しました。

この冊子は、広島平和記念式典に参加し、犠牲者に鎮魂の祈りを捧げ、平和の尊さを直に体験されたみなさんの感想文をまとめたものです。

本冊子が平和について考える一助となれば幸いです。

平成 29 年 11 月

上 越 市



## 目次

|               |   |
|---------------|---|
| 発行に当たって ..... | 1 |
|---------------|---|

|          |   |
|----------|---|
| 目次 ..... | 2 |
|----------|---|

## 感想文

### 平和な世の中の実現に向けて

|                      |   |
|----------------------|---|
| 城北中学校 2年 清水 誠一 ..... | 4 |
|----------------------|---|

### 核兵器のない未来に向けて

|                      |   |
|----------------------|---|
| 城東中学校 3年 勝沼 雅貴 ..... | 5 |
|----------------------|---|

### ぼくが広島で学んだこと

|                      |   |
|----------------------|---|
| 城西中学校 3年 松木 滉太 ..... | 6 |
|----------------------|---|

### 広島で実感したこと

|                     |   |
|---------------------|---|
| 雄志中学校 3年 田中 充 ..... | 7 |
|---------------------|---|

### 広島派遣を通して

|                       |   |
|-----------------------|---|
| 八千浦中学校 3年 三上 優月 ..... | 9 |
|-----------------------|---|

### 戦争と平和

|                      |    |
|----------------------|----|
| 直江津中学校 3年 勝嶋 叶 ..... | 10 |
|----------------------|----|

### 広島に行って学んだ事

|                        |    |
|------------------------|----|
| 直江津東中学校 3年 吉村 拓斗 ..... | 11 |
|------------------------|----|

### 広島を訪れて実感したこと

|                      |    |
|----------------------|----|
| 春日中学校 3年 岩嶋 耀太 ..... | 12 |
|----------------------|----|

### ぼくの「平和記念式典参列」報告

|                        |    |
|------------------------|----|
| 潮陵中学校 3年 和瀬田 銀次郎 ..... | 13 |
|------------------------|----|

### 戦争と平和

|                      |    |
|----------------------|----|
| 安塚中学校 3年 吉野 菜々 ..... | 15 |
|----------------------|----|

### 広島の今の姿

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 浦川原中学校 3年 小野 政昌 ..... | 16 |
|-----------------------|----|

### 広島で学んだこと

|                      |    |
|----------------------|----|
| 大島中学校 3年 岩野 美咲 ..... | 17 |
|----------------------|----|

|                            |    |           |       |    |
|----------------------------|----|-----------|-------|----|
| 広島平和派遣をとおして<br>牧 中 学 校     | 3年 | 横 尾 祐 樹   | ..... | 19 |
| 目をそらさず<br>柿 崎 中 学 校        | 3年 | 上 杉 悠 真   | ..... | 20 |
| 広島研修で感じたこと<br>大 湯 町 中 学 校  | 3年 | 新 澤 快 斗   | ..... | 21 |
| 広島平和記念式典に参加して<br>頸 城 中 学 校 | 2年 | 村 松 咲 希   | ..... | 22 |
| 未来に伝える原爆の恐ろしさ<br>吉 川 中 学 校 | 3年 | 中 村 虎 太 郎 | ..... | 24 |
| 自分を見つめ直す場所・広島<br>中 郷 中 学 校 | 1年 | 加 藤 豪 梧   | ..... | 26 |
| 平和な暮らしを続けるために<br>板 倉 中 学 校 | 3年 | 清 水 綾 女   | ..... | 27 |
| 世界中の笑顔を祈って<br>清 里 中 学 校    | 2年 | 若 田 部 朱 里 | ..... | 28 |
| 広島の声<br>三 和 中 学 校          | 3年 | 本 保 巴 菜 子 | ..... | 29 |
| 広島と考える<br>名 立 中 学 校        | 3年 | 石 橋 絢 子   | ..... | 30 |
| 日々<br>上越教育大学附属中学校          | 2年 | 奥 泉 梅     | ..... | 31 |
| 私たちの使命<br>直江津中等教育学校        | 2年 | 小 林 永 知   | ..... | 32 |
| 非核平和友好都市宣言文                |    |           | ..... | 34 |

# 平和な世の中の実現に向けて

城北中学校 2年 清水 誠一

72年前の8月6日、穏やかな空に史上初となる原子爆弾が広島に投下されました。そして72年後の8月6日、私は広島にいます。なぜこの穏やかな空の下、未だに何千、何万もの核兵器が存在しているのでしょうか。人や町を一瞬で奪い去る核兵器が存在している平和とは何でしょうか。派遣中学生として参加し、様々なことに衝撃を受けました。

まずは、平和記念式典でのスピーチです。「被爆して苦しんだ方々が、復興のため、あきらめなかったからこそ、今の広島があります。」という言葉がとても印象に残りました。また、他の方のスピーチも一つ一つの言葉に心がこもっており、その思いが広島をここまで復興させたのだということが伝わってきました。「70年は草木が生えない」と言われていた広島を、70年あまりでここまで復興させてきた方々のご苦労は、想像を絶するものだと思います。

さらに原爆ドームを実際に見てみると、目に、耳に、肌に原爆の凄惨さが伝わってきました。原爆ドームの周りは72年前の原爆投下の直後のまま、時間が止まっているように感じました。原爆ドームを見上げながらも自分が72年前ここにいたら、と考えると戦慄が走ります。公園内の慰霊碑に涙を流して手を合わせている方の姿を見たとき、胸が苦しくなりました。何年たっても原爆がつくり出した悲しみは消えないのだと感じました。核兵器が未だにない世界で、平和を実現することはできるのでしょうか。だからといって何もせず、誰かがやってくれるだろうと待っていても平和が訪れることは決してないでしょう。戦争の恐ろしさを知った私たち一人一人が、まず自分の周りの人に、そして後世に伝えていくことで、少しずつ、平和は近づいてくるのだと思います。人類がこの歩みを絶えず続けていくことが、平和な世の中の実現につながると信じています。

# 核兵器のない未来に向けて

城東中学校 3年 勝沼 雅貴

8月6日、平和記念公園にはたくさんの方が訪れていました。世界各国からも大勢の人が訪れ、世界中で平和について考えられているのだと実感しました。

今年7月、国連では、核兵器禁止条約を採択し、世界中で、核兵器廃絶に向かう決意が示されました。

私は核兵器について授業で学び、資料や先生の話聞いて、理解したつもりでした。しかし、実際に広島に来て学び、核兵器の恐ろしさを感じました。

広島平和記念資料館では、原爆投下により8時15分で止まっている時計や黒焦げになった三輪車、爆発時の熱線で変形したガラス瓶など、原爆の威力を伝える遺品がありました。

さらに、被爆者が、原爆投下直後の広島の様子を描いた「原爆の絵」もありました。渦巻く熱風、巨大なきのこ雲や黒い雨、頭髪や皮膚が焼けただれている人々、瓦礫の下になり助けたくても助けられない様子など、それらの絵を見て言葉を失いました。

科学技術が進歩している今日、核兵器の威力は72年前の数千倍にもなっています。もし使用されたら、地球は破壊され、人々は滅びてしまいます。そう考えると、とても怖くなります。未来を奪ってしまう核兵器は、持っていて意味はありません。だから私たちは、もっと核兵器について学ばなくてはいけないと思います。それが、核兵器をなくすことにつながると思います。

近年被爆者が高齢になり、体験談を聞く機会が少なくなりつつあります。だからこそ、今度は私たちが核兵器について知ったり学んだりしたことを家族や友達と語り合い、一人一人が平和について考え、伝えていかななくてはいけないと思います。そして、私はこの先、戦争や核兵器がこの世から無くなることを、強く願います。

最後に、このような貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

## ぼくが広島で学んだこと

城西中学校 3年 松木 滉太

ぼくは今まで、平和について深く考えたことはありませんでした。広島に原爆が落とされたことも知っているくらいでした。

ですが、今回の体験を通して、たくさんの事を学ぶことができました。

ぼくが一番印象に残っていることは、平和記念資料館の見学です。そこにあったのは、ショックなものばかりでした。焼けこげた服や原爆の被害を受けた人の写真もありました。ぼくはこれらを見て、何でこんなことになってしまったのだろうと思いました。いつもと変わらない平和な暮らしをしていたはずなのに、たった一つの原子爆弾で、罪のない広島市民がたくさん被害を受けました。平和記念資料館には、当時のまま残しているものが多く、そこから原爆の恐ろしさ、そして今、平和で暮らせることへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。今では広島は復興し、ビルがたくさんならんでいてとても大きな都市となっています。みんなが平和な暮らしをすることができています。

しかし、中にはまだ原爆の後遺症を持った人がいて、今もまだ苦しい思いをしている人がいます。原爆を経験した人は年々高齢化しています。そのような中で、原爆を経験した多くの人が、何とか次の世代では原爆がなくなり、平和な世界になるようにうたえ続けています。私達はその思いに応えなければなりません。今、世界では原爆を廃止にしようと多くの国が立ち上がっています。しかし、唯一の被爆国である日本はそれに賛同していません。つまり、日本は原爆があってもいいと思っているということです。

もしかしたら、原爆はあってもいいと思っている人もいるかもしれません。しかし、多くの人が原爆も戦争もない平和な世界を望んでいるはずで、平和でいつづけるためには、一人一人が平和への意識を持つことが大事だと思います。皆が平和への意識を持ち、協力していかなければ、平和になるわけがありません。一人一人の力は小さいかもしれませんが、皆の力が合わされば、とても大きな力になります。その中の一人は、私達のことです。一人一人が今、平和に暮らせていることに感謝し、核や戦争をゆるしてはならないという気持ちをもって生活して行ってほしいと思いました。

# 広島で実感したこと

雄志中学校 3年 田中 充

広島に原爆が投下されてから 72 年後の今年、僕は初めて広島の平和記念公園を訪れました。

その日はとても暑く、空には青空が広がっていました。72 年前の 8 月 6 日も、このような天気だったと聞きました。

72 年前、広島の人々は、こんな青空から原爆が落ちてくるとは思ってもいなかったと思います。僕は初めて本物の原爆ドームを見て、人々の生活を一瞬で変えてしまった原爆の恐ろしさを感じました。

広島平和記念公園には、たくさんの人々が訪れており、平和記念式典には、様々な国の人々が参列していました。平和記念式典で、広島市長のお話で印象に残った言葉があります。それは、「一人一人が活かされていることの有難さ」という言葉です。僕はこの言葉を聞き、日々の僕たちの暮らしが当たり前だと思わず、平和に生活ができることに感謝し、毎日を過ごしていくことが大切だと改めて感じました。

平和記念資料館では、被爆者の遺品や、原爆が投下された後の広島の写真、そして原爆ドームを見学しました。どれも、原爆の残酷さを物語っているように感じました。その中でも、原爆の爆風によって破壊された、たくさんの建物の残がいの写真や、全身にやけどを負った痛々しい姿の写真、実物のぼろぼろにちぎれている少年の衣服などは、当時の悲惨な状況が伝わってきて、とても胸が痛みました。しかし、今の広島は 72 年前の悲惨な状況を感じさせない高層ビルが建ち並ぶ大都市に発展していました。ここまで復興できたのは、広島の人々の計り知れない努力の末の結果だと強く感じました。

僕は、雄志中学校の代表として、広島で貴重な経験ができました。ここでの経験を忘れずに、責任を持って雄志中学校の仲間に、原爆の悲惨さや広島の人々の力を伝えていきたいと思います。そして、平和に対する思いや、世界から核兵器をなくすという強い気持ちを、全校生徒と共有し、核兵器のない平和な世界が実現されることを願い、日々を過ごしていきたいです。

最後に、このような貴重な体験ができる機会を設けて下さった上越市の皆様、本当にありがとうございました。





《出発式》

# 広島派遣を通して

八千浦中学校 3年 三上 優月

広島に原子爆弾が投下されて72年が経ちました。72年前の8月6日午前8時15分、広島の高い空に一つの原子爆弾が投下されました。一瞬にして広島の高は破壊され数万人の尊い命を奪いました。

広島へ行って、驚かされた事がたくさんありました。広島は原子爆弾の影響で70年間は草木も生えないだろうと言われていたそうです。それにもかかわらず、私が初めて見た広島はものすごく発展していて、原子爆弾が投下されたとは思えないほど素敵な街でした。

ビルやマンションもたくさんあり、本当に驚きました。その一方で、2日目に原爆ドームを見て、当時の悲惨さが伝わってきました。原爆ドームはすごくボロボロで、鉄骨がむき出しになっていて、コンクリートの破片が飛び散っていました。また、原爆ドームのすぐ側には川が流れていました。原子爆弾が投下された直後、皆熱くて水を求めて多くの人々が川に入り亡くなったそうです。当時のその川は死体で溢れていて、川の底が見えなかったそうです。

平和記念式典に参列させていただき、平和記念資料館も見学しました。資料館での衝撃がものすごく大きかったです。原子爆弾で服が破れ皮膚が垂れ下がりながら、水を求めている人々の写真や、ボロボロで血まみれになっている服が展示されていて、当時の恐怖や悲惨さが伝わってきました。

今回の広島派遣を通して、私たちが現在、ものすごく幸せな生活を送れていることを実感しました。改めて一日一日を大切にしていきたいと思いました。そして、私たちは広島と長崎、合わせて35万人もの尊い命が失われたという過去の事実を受け止め、二度と戦争の無い世の中をつくらなければならないと、強く心に誓いました。

# 戦争と平和

直江津中学校 3年 勝嶋 叶

「戦争」とは、人間が起こしてしまう最も愚かな行為だと私は思った。戦争は何一つ良い事などない。それなのになぜ起きてしまうのか。私は広島に行き、改めて「戦争と平和」について考えた。

広島に投下された一発の原爆で20万人もの命が奪われ、今もなお、被爆者として苦しんでいる方々がいることに、原爆の威力と恐ろしさを感じた。

被爆者の方の実際のお話を思い出しながら、資料館で原爆が投下された当時の様子のシミュレーション動画を見た時は、「こんなことが起きていいのだろうか。」「人間同士が傷つけ合い、何になるのだろうか。」「さぞかし熱かっただろう、怖かっただろう。」と、とても胸が痛くなった。

そして、平和記念式典の平和の誓いの言葉にあった「亡くなった母と姉を見ても涙が出なかった…感情までも奪われた。」という言葉がとても衝撃的だった。原爆で奪われたのは、命、家族、仲間、生活だけでなく、人の心の一番大事な部分までも奪ってしまったのだ。私は戦争の悲惨さを強く感じた。

私は今、何一つ不自由なく過ごしている。毎日学校へ通い、勉強ができる。そして、そこには大好きな友達がいる。家には、私のことを一番に思い心配してくれる家族がいる。自分のやりたいこと、好きなことに打ち込める環境がある。これらは全て当たり前と思っていたが、広島を訪ねてからは、考えが変わった。当たり前なことなどないのだ。だから、これからの生活に日々感謝し、一日一日を大切に過ごそうと思った。

私はこれを機に、広島で起きた核兵器の恐怖、「戦争」はどんな理由があろうとも決して起こしてはならないものであることを世界中の人々に伝え続けたい。世界中の一人一人が平和を愛し、互いを認め合い、手を取り合っていけば、必ず戦争はなくなると思う。

「世界平和」を私は祈り続けます。

# 広島に行って学んだ事

直江津東中学校 3年 吉村 拓斗

私は、直江津東中学校の代表として広島に行き、平和について学んできました。その中で私が思ったことは3つあります。

1つ目は、原子爆弾はとても恐ろしいということです。バスの中で見た『はだしのゲン』のビデオで、約ゴルフボール1個分の量の核で、広島を瞬時に焼野原にしてしまい、人が吹き飛ばされたり、燃えてしまったりして、たくさんの人を死へと導いてしまうことを知りました。実際、広島を歩いて、その平和な町並みの中にある原爆ドームを見た時の衝撃は、言葉では言い尽くせないほどでした。

2つ目は、平和は向こうからやってくるのではないということです。なぜなら、平和な世界をつくるためには、自分たちからいろいろな事に挑戦しなければならないからです。だから、広島の人々は元の町に戻すためにたくさんの取り組みをして、様々な困難に挑戦をして、とてもすごい精神力だと思いました。私もこの挑戦する精神を見習って、これから先、平和のために、たくさんの事に挑戦できるようにがんばりたいです。

3つ目は、私たちはとても幸せだということです。原子爆弾を落とされた事により、幼い子どもから大人まで、たくさんの方が亡くなりました。生き残った人も黒い雨を浴びて、2、3日後に亡くなったり、後遺症が残ったり、今でも苦しんでいます。その一方で、何事もなく、命を失うこともなく、何かに怯えることもなく、笑顔で暮らすことのできる今の私たちは、その人たちに比べてどれだけ幸せなのだろうかと思います。日々、何気なく暮らしている私たちも、原爆投下の日の事を知ることによって、もっと平和を実感することができると思います。原爆を体験している人は高齢になり、原爆の恐ろしさを伝える機会は減ってきています。だからこそ、私たちのような戦争経験のない若い人たちが、もっと原爆について知り、後々まで語り継いでいくことが必要だと思っています。それが私たちにできる大切な役割だと思っています。

最後に、今でも原爆の後遺症に悩まされている人のために、どんな方法でもよいので何か力になりたいです。そして、あのような悲惨な出来事がもう起こらないように、みんなが笑顔で過ごせるように、日々、広島を原爆の事を忘れることなく、頑張っていきたいです。

# 広島を訪れて実感したこと

春日中学校 3年 岩嶋 耀太

平和記念式典に参列し、被爆者の方からたくさんのお話を伺いました。その中で、改めて戦争の愚かさや、命の尊さについて考えました。

普通に生活していた日々が突然奪われたこと。平和だった世界が一瞬にして地獄へと変わってしまったこと。苦しみや復興への長い道のり。被爆者のみなさんの言葉は、一つ一つずっしりと心に響きました。

原爆ドームは、これまでテレビなどの映像で見ていたよりも崩れているところがありました。当時の原爆の破壊力のすごさと戦争が終わってから、これまでの長い時間を感じました。

平和記念資料館には当時の写真がたくさん展示されていました。焼け野原となった広島風景や、ひどくやけどを負って男女の見分けがつかなくなるくらいになった人が写っていました。生きのびた人たちでも、目の前で家族を失い、涙も出ないくらいに感情を奪われた人もいたそうです。原爆は、身体に傷を負わせるだけでなく、心まで深く傷つけてしまうのです。

戦争は悲惨で、何も得るものではありません。このことは、これまでの学習でわかっていたつもりでしたが、実際に広島を訪れて、見て、聞いて、学んで、感じて、実感しました。

現在、北朝鮮では、核兵器の開発が進んでいます。戦争と核兵器の無い世界にするために、唯一の被爆国である日本から活動していかなければなりません。また、後世に戦争の愚かさや、命の尊さを伝えていかなければなりません。今、幸せに生活している日々、平和な世界であること、これらは決して当たり前のことではなく、有り難いことなのです。お互いを認め合える関係を築いていきましょう。そして、みんなで平和な未来をつくりましょう。

# ぼくの「平和記念式典参列」報告

潮陵中学校 3年 和瀬田 銀次郎

広島に到着して、ぼくの目にとび込んで来たのは、復興を遂げた広島の街の活気あふれる光景でした。そのときは、原子爆弾による甚大な被害は、何世紀も前の、はるか昔のことのようには思えました。

その後、広島平和記念公園を訪れました。そこでぼくは、衝撃的な事実を知らされました。「原爆の子の像」のモデルになった、佐々木禎子さんのことです。禎子さんは、2歳で被爆し、10年後の12歳で「白血病」を発症しました。「治したい、生きたい」という必死な思いで祈りを込めて鶴を折り続けましたが、8か月の闘病の末、その短い生涯を終えました。このことが契機となり、折り鶴が平和のシンボルとして、毎年、広島に約1千万羽、重さにすると約1トンもの折り鶴が捧げられています。そうです。その1千万分の300が私たち潮陵中学校の折り鶴です。しかしぼくは、ただノルマだけを気にして折っていました。禎子さんのことを知り、そんな自分をはずかしく思いました。

翌日、平和記念式典に参列させていただきました。毎年、テレビ放映などで目にしてきた光景ですが、実際に参列する中で気づいたことがあります。それは、参列者の中に外国の方々がたくさんいらっしゃったということです。国籍はわかりませんが、「核廃絶」と「世界平和」を祈るためにつけて来られたのだと思いました。「ノーモア・ヒロシマ」。多くの犠牲、広島と長崎の人々の思いが、世界中の多くの人々の心を揺り動かしてきたことに感動をおぼえました。

ほかにも、広島平和記念資料館で受けた衝撃や、夜の灯ろう流しで感じたことなど、皆さんに伝えたいことがたくさんありますが、今、胸をはって言えることは、この3日間でぼく自身が変わることができた、ということです。正直なところ、初めは、生徒会長という使命感だけで参加していました。しかし、この3日間を通して、「戦争の悲惨さ」「命のはかなさ」「平和の大切さ」などについて深く考えることができました。そして、自分自身の15年間を振り返るとともに、今の自分に何ができるか、何をすべきかについて真剣に考えることができました。

1945年8月6日と9日、広島と長崎から、多くの尊い命とたくさんの人々の日常が戦争によって奪われました。それから72年。広島・長崎の人々の強い思いで、めざ

ましい復興を遂げるもう一方で、被爆された方々や支えてこられたご家族が亡くなっている現実があります。世界で唯一の被爆国であるこの国の一員として、広島と長崎で起こった事実と、そのことによる多くの犠牲、そして、たくさんの人々の「平和」への思いを、しっかりと語り継いでいくことが21世紀を担うぼくたちの責任だと思います。ぼくはまだ中学生です。できることも限られています。しかし、代表として貴重な体験をさせていただいた一人として、まずは仲間たちに、後輩たちに、3日間で学んだことを伝えることから始めようと思います。

「広島平和記念式典」に参列させていただき、本当にありがとうございました。



《原爆の子の像の前で》

# 戦争と平和

安塚中学校 3年 吉野 菜々

広島町は、あの恐ろしい事実がまるで嘘のように思えるほどきれいだった。

私は今の日本は、戦争もなく平和だと思っていた。しかし、核兵器はこの世に今も存在し続け、それを使おうとする人間がいる。この事実がある限りいつ戦争が始まるか分からない。明日かもしれない。1分後かもしれない。戦争や世界の現状を学べば学ぶほど、平和だと思っていたことも、実際はそうではないかもしれないと気づいた。

平和記念資料館には、2つの日数が表示されている「地球平和監視時計」があった。1つは広島への原爆投下からの日数、そしてもう1つ、最後の核実験からの日数「331日」とあった。核実験が1年もたたない、つい最近の出来事と考えると恐ろしかった。この数字がリセットされることを、誰もしてはいけないのだと強く感じた。

「平和は決して歩いてはこない。」広島でこう教わった。

でも、私たちが平和に向かって歩くことはできると思った。そのために私は何ができるだろうか。微力だと思うが、私がこの広島での体験事業を通して学んだ様々なことを、まずは家族や学校の友達に伝えようと思う。日本は世界で唯一、原爆による被害を受けた国だ。その事実を風化させないため、そして再び同じことを繰り返さないためにも戦争や平和について考えることはとても大切だ。

しかし、戦争体験者は年々減り、戦争を知らない人が増えているのが現状だ。

だから私は、被ばくした人々の思いを胸に、広島で学んだことや感じたこと、戦争の事実、命の尊さやありがたさを少しでも多くの人に語り継いでいきたい。



# 広島の今の姿

浦川原中学校 3年 小野 政昌

広島＝原爆。広島という単語を聞いた時、私が思い浮べるイメージはこれでした。しかし、そのイメージは広島へ行ったことで瞬く間に崩れました。

私は上越市が毎年行っている「広島平和記念式典への中学生の派遣」に浦川原中学校代表として参加してきました。広島では折り鶴の献呈、平和記念式典への参加、灯ろう流しなど様々なことを初体験してきました。すべての体験がすごく有意義なものであったため「特に」はないのですが、印象に残っているのは被爆者の話です。

被爆者の方は、すごく細かく 8月6日のあの場所で起きた事を話されていました。しかし、何よりあの時の事を話している時の顔がすごく辛そうだったことが印象的でした。聞いた人によってはかすれそうな声で話している人もいましたが、その中に力強さがあり、一言一言に重みがありました。

そのような姿を見て、私はその場には負のオーラではなくその反対のオーラが漂っているのに気が付きました。私は広島へ行く前にも高田図書館で被爆者の話を聞きました。しかし、その時にただただ話に圧倒されて気付かせませんでした。私が聞くだけで圧倒された話を、実体験してその辛さを知っているのに、その辛さを押し殺して平和のためにと話してくださった被爆者の方々。この方々だからこそ発することのできるオーラだと思いました。

広島＝原爆。このイメージは、広島の人や景色を見て、広島は平和への最前線に今いるのだなと思いました。つまりイメージが広島＝原爆＝平和への最前線に変わりました。

戦後 72 年。今の世界はどんどん平和から遠ざかっている気がします。そんな今の世界がより平和につながるために犠牲者に鎮魂の祈りをささげるとともに、平和への誓いを新たにしていきたいです。

# 広島で学んだこと

大島中学校 3年 岩野 美咲

今から72年前の8月6日、広島に一つの原子爆弾が投下され、一瞬で多くの人の命を奪い去ったのです。命だけではなく、人々の将来・夢・希望なども奪いました。

私は広島派遣が決まるまで、原爆や広島のことをあまり知りませんでした。だから、広島に行つてたくさん学んで来ようと思いました。

広島には、たくさんの記念碑や建造物があり、実際に見て迫力のあるものもたくさんありました。中でも特に迫力があつたのは、原爆ドームです。原爆ドームは、元々「広島県産業奨励館」という名前でした。建物の中にはいろいろな資料があつたそうです。けれどそれも全て焼けてしまったそうです。このようなことを心に留めて再び原爆ドームを見てみると、切ない気持ちでいっぱいになりました。

8月6日に行われた広島平和記念式典では、8時15分になると平和の鐘が鳴り、黙祷を捧げました。黙祷をしていると、被爆者の姿や原爆が落下された時の様子が浮んできて胸が苦しくなりました。

被爆者の大田潤子さんの「ヒロシマの証明」というDVDを見ました。潤子さんは爆心地から1.6キロメートルの所に居て、原爆が落ちて光つた瞬間、意識がなくなつてしまい目が覚めたら外が真っ暗になつていたそうです。辺りを見渡すと、瓦礫の中に上級生がいて、助けることができ、一緒に避難したそうです。潤子さんの未来への言葉には「世界中の人が平和を愛し、手をつないで頑張つて行けたら、戦争はなくなるのではないのかと思う」と書いてありました。潤子さんの言葉は、被爆者にしか語れない熱い思いであつたと思います。

被爆者には、友達や恋人、そして大切な家族を失つた方々がたくさんいること、その時に生き延びても放射能で亡くなつてしまう方々がいたことも知りました。私には、友達や家族がいない日々は考えられません。突然いなくなつたら怖いと思つたので、戦争は決して起こしてはいけないと思いました。

朝、「行つてきます」と言つたら「行つてらっしゃい」と言つてくれる家族のみんなや、学校に行くと、面白い話をたくさんしてくれるクラスのみんな、勉強を教えてくれる先生方、学校から帰るといつも同じ場所にある家があつて、幸せだと思いました。

今回の広島派遣で、絶対に戦争は起こしてはいけないということを強く思いました。戦争の恐ろしさや、原子爆弾の悲惨さを後世に伝え、二度と戦争の起こらない平和な世界になって欲しいと思います。



《広島平和記念式典》

# 広島平和派遣をとおして

牧中学校 3年 横尾 祐樹

8月5日から7日までの3日間、私は上越市内23人の中学校の代表者とともに、広島平和記念式典が行われる広島市に、戦争で犠牲となった人々に鎮魂の祈りをささげるとともに、平和の尊さを直に体験すべく行ってきました。

広島に原子爆弾が落とされてから72年目の8月6日。私は、日本国内をはじめ世界各国から平和への祈りを捧げに人々が訪れる、広島平和記念式典に参列しました。

たった一つの原子爆弾によって30万人もの人々が苦しみ、そして亡くなられたことを思うと、胸が痛みました。

献花の次に行われた1分間の黙とうでは会場が一瞬のうちに静寂に包まれ、平和の鐘の音と共に、平和を願う人々の祈りが広島の地に捧げられました。

そして、広島市長の平和宣言に始まり、子ども代表の平和への誓い、そして安倍内閣総理大臣、広島県知事、国際連合事務総長らのあいさつに続きました。子どもから国のリーダー、世界のリーダーまで、平和を願う気持ちは一つなのだと感じました。

その後、平和記念公園内をガイドの方に案内していただきました。途中で原爆ドームの横で話を聞きました。

ガイドの方の話は、原爆ドームを目の前にして聞くことで、授業で黒板に向かって聞く説明とでは大きく差がありました。想像するだけで、圧倒的な死の恐怖が感じられました。

今、私たちは死の恐怖など、まず感じる事のない平和の中に生きています。

この広島派遣で考えたことは、私たちは今、過去の大戦の反省によって受け継がれてきた平和のもとに生きているということです。もしも、今ここに原子爆弾が落とされたらどうなるかと考えてみても想像が付きません。原子爆弾など落ちてくるわけなどない、そう考えてしまいます。

しかし、実際に72年前、起きています。今、私たち中学生の力では、変えることのできないもののほうが多いかもしれません。しかし、日々を大切に生きようとする、平和を願う気持ちを持ち続けることがいかに大切かということ私を広島で学びました。「平和を願う気持ちを持ち続けること。」それが、戦争で犠牲になった人々への思いに報いることであり、世界恒久平和実現への第一歩です。

# 目をそらさず

柿崎中学校 3年 上杉 悠真

小学校2年生の時に、ふとページを開き「怖い」と思って二度と読まなかった本、それは『はだしのゲン』です。それから7年たった今、幼さゆえ目をそらした世界に、もう一度触れる機会をいただきました。

広島平和記念資料館で目の当たりにしたもの。まさしく『はだしのゲン』に描かれていたものと同じ光景でした。

原爆投下の瞬間まで、小さな子どもが乗っていた三輪車。焼け焦げた椅子には黒い影が残されていました。何も知らずに犠牲になった無数の子どもたちの一人だと思ったら、胸が苦しくなりました。

被爆後の子どもの日記には、「熱くて苦しくて、のどが渴いて黒い雨を飲んだ。」と記されていました。また、別の子どもの絵には、被爆した人の皮膚が焼けただれてる様子が描かれていました。

原爆直下で、何も分からないまま一瞬にして命を落とされた方の悲しみ、爆撃を受けて熱さや痛みと闘って亡くなった人の辛さ、直接の爆撃、爆風から生き延びても、放射能のせいで亡くなった方々の苦しみ。資料館の展示物からは、原爆がもたらした数えきれない悲劇が伝わってきました。一つ一つのものがやはり「怖い」と感じるものでしたが、今回は、目をそらさず、しっかり見つめようと思いました。資料館を見学する前に参加した平和記念式典で、72年前に被爆した方々が平和を祈る姿、広島の小学生がその気持ちを受け継いで平和への思いを語る様子を見たからです。

「戦争は失うものが大きすぎる。」と感じると同時に、「世界にはまだ、本当の平和は訪れていない。」と思いました。過去の過ちから目をそらさず、平和な未来を思い描くことができるのは、今生きている私達だけです。平和への思いをつなぎ、その思いを大きくして、真の平和、永遠の平和を築いていきたいと思いました。

# 広島研修で感じたこと

大潟町中学校 3年 新澤 快斗

「未来の人に、戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。」

これは、広島平和記念式典で地元小学生の代表が「平和への誓い」として述べた言葉の一部です。僕の心に強く残っています。

72年前の8月6日午前8時15分、広島空に一発の原子爆弾が投下されました。その原子爆弾は一瞬にして罪のない人々の命を奪い、広島は焼け野原となりました。核兵器の威力は想像を絶するものがあり、人々の命・夢・暮らし、あらゆるものを瞬時に奪ってしまうとても恐ろしいものであり、絶対に廃絶しなければなりません。

今年7月、国連で核兵器の全廃と根絶を目的とした核兵器禁止条約が採択されました。しかし、その会議に核保有国は参加せず、現在も地球上には1万5千発以上の核兵器があるのが現実です。核兵器廃絶に向け、全世界の人々が命の尊さ、大切さを考え、「核兵器のない平和な世界」を築いていくことが大事だと思いました。

今でも、原子爆弾による被害で苦しんでいる方々が大勢います。その被害者の方々は、僕たち若い世代に当時の体験を語ってくれます。実際は、思い出すのも辛いはずですが、それなのに、なぜ語ってくれるのでしょうか。それは、もう二度とこのような悲惨な出来事を起こしてほしくないという強い思いがあるからです。僕たちは、その思いを次の世代に語り継いでいかなければなりません。

現在、僕たちは、何不自由なく暮らせています。それは当たり前のことではなく、恵まれているということです。家族や友達、支えてくれる人がいて、安心して過ごせる日々感謝しなければなりません。誰もが争いのない平和な世界を望んでいます。一人一人が共感する気持ちを持ち、前進していくことを願っています。

僕は、今回の広島派遣の3日間で学んだことを多くの人に伝え、多くの人からもっと平和について考えてほしいと思います。僕自身、今できることを精一杯努力していきたいと思います。

# 広島平和記念式典に参加して

頸城中学校 2年 村松 咲希

私は広島に行って、現在の暮らしが平和だということを、改めて感じました。実際に目を見た原爆ドーム、耳で聞いた被爆者・遺族・市長や総理大臣のお話、広島に行って体験したことは、どれも心に刺さるようなものでした。この3日間は、絶対に忘れられない経験です。

8月6日の「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」では、広島市長・県知事や総理大臣などたくさんの来賓の方々が来られました。8時から始まり、献花などをして、忌まわしき原子爆弾が落とされた昭和20年同日と同じ時刻の8時15分になりました。司会者の「黙祷」の合図で、一斉に広島の町が静まりかえりました。町が一斉に静まりかえるほどのこの黙祷には、一人一人の願いや想いが込められているのだと感じました。その後、広島市長の平和宣言がありました。私はたくさんの人の話を聞いた中で、「核兵器」という言葉が印象に残っています。広島に落とされた原子爆弾は核兵器です。それをなくしないと本当の平和など、いつまでたっても訪れないと思いました。

そんな中、市長は今年の7月に「核兵器禁止条約が採択された」と言っていました。それは核保有国や核の傘下にある国々を除く122か国が賛同してできたものです。しかし、まだ多くの国が核兵器を持っているということです。そしてこの条約ができたのは今年、原爆が落とされてから何十年もたってからです。なぜもっと早くこの条約は作られなかったのかと、思ってしまいました。今の日本は幸せです。非核三原則がとっても大切だと改めて感じました。

式典の後、献花・献水慰霊式に出席しました。この式は長年続き、上越市の中学生が毎年出させていただいている式です。ここでもたくさんの人たちからお話を聞き、私も献花をさせていただきました。この式を主催している方が「出席している全員に献花をしていただきたい。」と言ってくださり、全員が献花を行いました。実際に原爆ドームを見ながらの献花は、心が痛くなりました。ですが、とても良い経験をさせてもらえたと思っています。

午後からは、広島平和記念資料館に行きました。ここには、原爆が落ちる前の広島の様子や核兵器の危険性、黒い雨と呼ばれる放射能を大量に含んだ雨のことなど、

たくさんの説明が書かれていました。また、実際に当時の中学生が着ていた服の展示や、たくさんの写真もありました。平和記念公園では、ガイドの方からお話を聞きました。私たちと同じくらいの中学生も原爆で命を落としてしまったこと、その時に一命を取りとめたものの後遺症が残り、ずっと悩んでいる人もいることなど、たくさんのお話が聞けました。その話の中で一番驚いたことは、新潟県長岡市にも原爆が落とされていたかもしれないということです。なぜ原爆が落とされなかったかという、飛行機の燃料が関係しているそうです。当時、原爆を乗せた飛行機は長岡まで行くことも可能でした。しかし、飛行機はとても重い原子爆弾を乗せています。だから、その分の燃料がよぶんに必要なのです。もしかすると途中で墜落する可能性もあります。そのため、飛行距離が長い長岡には原爆は落とされず、距離が近い広島や長崎が原爆の標的となってしまったというのです。その結果、この2つの県に多くの被害をもたらしたのです。この話を聞いて、なんてひどいのだろうと思いました。それと同時に怒りも込み上げてきました。

夜には灯ろう流しが行われ、私も実際に灯ろうを流しました。川を見ると、たくさんの灯ろうが光り輝いていました。この一つ一つが一人一人の願いなのだと、見ていてとても気持ちが安らぎ、改めて平和への思いが強くなりました。

この3日間、いろいろなことを学びました。広島に行った後、8時15分という時間が重要なものだと思うようになりました。また、最近のニュースでも北朝鮮のことが話題になっています。私はそれを見て、なんでこんなことをするのだろうと考えています。戦争は絶対に起こしたくありません。今回の広島へ行った経験を、私は学校に戻った後、他の人に伝え、いつまでも忘れないでいることが、今の私にできることだと思います。これからももっともっと勉強して、少しでも平和な国が増えるようお願いしたいと思います。



# 未来に伝える原爆の恐ろしさ

吉川中学校 3年 中村 虎太郎

僕は、広島平和記念式典に参列するため、広島に行きました。初日は、学校で折った折り鶴を「原爆の子の像」に捧げてきました。暗くてあまり像を見ることはできませんでしたが、この像を作るきっかけになった佐々木禎子さんの話を聞いていたのでとても悲しい気持ちになりました。

2日目は、平和記念式典に参列しました。暑い日差しが照りつける中でしたが、体調はとてもよかったです。話を聞いていると、知っていることもあれば知らないこともありましたが、平和についてより一層考えが深まりました。

式典が終わった後、原爆ドームを見学しました。原爆ドームは、想像していたよりもひどく、すさまじいもので、僕は、鳥肌が立ちました。日本には、非核三原則があります。日本人は、非核三原則を正しく理解していく必要があると思いました。

平和記念資料館では、昔の広島市の町並みや、原爆が投下された後の広島市のようなすなどがありました。広島市に原爆が投下され、どのように変化していくのか、映像を見ることができました。このような危険極まりない原爆が、広島という人口の多い都市に投下されたことを思うと、ものすごい恐ろしさを感じます。また被爆者の残した遺品は、とても見るに忍びない物ばかりでした。

この広島派遣で、僕はより一層平和について考えることとなりました。

まず僕が行わなければいけないことは、学校の仲間にこのことを伝えることです。そして、仲間達は僕の話について、考えてほしいと思います。みんなが正しく戦争について考えることで、日本や世界も平和になることができるのです。

今の生活に感謝の気持ちを忘れず、日々を過ごしていきたいと思います。



《献花・献水慰霊式》



《平和記念公園ガイドツアー》

## 自分を見つめ直す場所・広島

中郷中学校 1年 加藤 豪梧

僕は、8月6日に上越市の各校の代表生徒と一緒に、広島平和記念式典に参列させてもらいました。僕はヒロシマへ行き、たくさんの事を得られたと思います。ヒロシマは僕にとって、人生への教訓を教えてくれた場所となりました。

まずは、僕を見直すきっかけになったことです。僕は、2学期の目標を「挑戦すること」にしました。なぜかという、ヒロシマで原爆の被害に遭われた方々の気持ちを知ったからです。僕は、原爆の被害に遭われた方々の話を聞きました。その方々は、「命を大切に自分のやりたいことは精いっぱい挑戦してほしい。」とっていました。その時僕は、今までの自分を振り返らずにはいられませんでした。今まで、面倒なことから逃げてきた自分がいたからです。被爆者の方々は、もう自分達のような体験をする人が出てほしくないとの思いから、あの言葉を僕達若い世代に伝えているのだと思います。教えてくれた方が被爆者だったからこそ、「挑戦すること」の大切さが分かりました。

次に原爆の被害の悲惨さです。広島平和記念式典では、自分が立っている場所が72年前に焼け野原になったなんて信じられませんでした。しかし、原爆が炸裂した時に一体どれほどの被害が出たのか、平和記念資料館で知ることができました。そこには、小学生のころに見た「はだしのゲン」で見たように日常品が被爆し、変わり果てた姿で置いてありました。さびだらけになった三輪車、高温でくっついたびんやぼろぼろになった服などがありました。他にも火傷を負った人やきこの雲の写真だけでも原爆がおそろしい力を発揮したことが分かりました。小さな原爆が何万人もの方の命を奪い、生活を奪いました。そして、この危険な原爆が日本の近くにあることを覚えていたいです。

僕はこの貴重な体験を胸に、今この人生を大切にしながら、逃げることなく、平和の大切さを生涯学んでいきたいです。

# 平和な暮らしを続けるために

板倉中学校 3年 清水 綾女

日本は、世界は、二度とこのような戦争をしてはならない。広島を訪れ、初めて平和記念式典に参加した私が強く心に刻んだのは、このことです。

もちろん、私は今までにも教科書や本などで、原爆被害の様子を見たり読んだりしたことはありました。しかし、実際に原爆ドームや平和記念資料館などを見たり、被爆者の方のお話を伺ったりして、今まで以上に原爆の恐ろしさを感じました。ボロボロに焼け焦げた三輪車、原爆が落とされた8時15分で止まった腕時計、放射線によって皮膚がただれたり、病気になったりした人々の姿。目にした物や写真に、私はショックを受け、これが現実起きたことなのだということに、とても悲しい気持ちになりました。

一方で、被爆し大きな被害を受けた広島の方々が、辛い中で助け合いながら広島の町並みを取り戻していったという、今まで知らなかった事実も知ることができました。今の美しい広島の町並みには、こんな苦労が隠されていたということに、人間のもつ力の強さを感じましたが、同時に、一瞬にして町を焼け野原にしてしまう戦争に対して、危機意識が一層高まりました。

私は広島に行くまで、戦争はしてはいけないということはもちろんわかっていました。しかし、実際に経験したことはないので、戦争についてしっかりと考えたことはありませんでした。ですが、今回の3日間の活動から、たった一発の原子爆弾でこんなに残酷なことが起こるということを知り、戦争について深く考えることができました。

日本は二度とこのような戦争を起こしてはなりません。そのためには、これからの日本を担う私たちの世代が、戦争や原爆について詳しく学び語り継いでいくことが必要だと思います。その第一歩として、まず私が、広島で見て感じたことを、家族や友達、たくさんの人に伝えていきます。核兵器など危険な物を所持している国がまだ存在している今、私たちは常に危険と隣り合わせなのだということを忘れてはなりません。平和な暮らしをこの先も続けるためにはどうしたらよいかを考えて、日々行動していきます。

# 世界中の笑顔を祈って

清里中学校 2年 若田部 朱里

8月5日～7日の3日間、上越市の中学校の代表生徒のみなさんと広島を訪れた。

今から72年前の8月6日8時15分、世界で初めて原子爆弾がヒロシマに投下された。照りつける太陽の下、一発の原子爆弾が建物、自然、そして、たくさんの人々の大切な命を奪った。被爆72年目の今年、被爆者や遺族の方々や81か国の海外の代表たちが参列し、犠牲者の方々を追悼した。平和記念式典では、広島市長をはじめ、多くの人が核の廃絶や平和の尊さについて、訴えていた。

なかでも私は、松井広島市長のスピーチが心に残った。「被爆の実相を見て、被爆者の証言を聞いていただきたい。そしてキノコ雲の下で何が起こったかを知り、被爆者の核兵器廃絶への願いを受け止めた上で世界中に『共感』の和を広げたい。」と訴えるのを聞いたとき、言葉では言い表せない気持ちになった。さらに、式典後、献花・献水慰霊式に参加、その後、平和記念公園をツアーガイドの方から説明していただきながら散策した。平和の灯のことを説明してくださった方が、「わたしたちが生きている時には、この火が消えることはない。みなさんの時代にこの火が消えることを願っています。」とおっしゃられたとき、ただならぬ責任感に包まれた。

私はこの3日間で、戦争の悲惨さや平和の尊さ、命の大切さについて考えてきた。戦後72年、1945年8月6日に原子爆弾が投下されてから、2万6298日が経った。今こそ、私たちが過去の歴史をしっかりと見つめ、歴史の事実を後世に伝えていかなくてはならない。世界中の人々が笑顔で暮らせるよう、私もできることからしたい。まずは、自分の身の回りから、言い争いや意味のないケンカがなくなるように、仲間の良さに気づき、互いに協力し合えるような雰囲気的清里中学校生徒会本部メンバーの一人としてつくっていきたい。

# 広島の声

三和中学校 3年 本保 巴菜子

火傷と負傷にあえぐ人々の写真。私はゾッとしました。ちぢれた髪、ドロドロに溶けて垂れた肌、真っ黒く焼け焦げた皮膚、横たわる多くの人々。苦しみを、悲しみを、怒りを訴えてくるのです。一つ、また一つと写真を見ていくと、それにともない、ジリジリ、ジリジリと、まるで何かにおいつめられているかのような感覚に陥りました。一瞬で焼け野原となった広島で、燃えたぎる炎の中、人々は熱さから逃れようと、必死の思いで川へ飛び込んだそうです。しかし、生き延びる力がもう僅かしか残っていなかった人々。川は、死体とがれきで埋めつくされていたといひます。

“同情”でも、“怒り”でもなく、私が抱いた感情は、“恐怖”でした。するどいナイフのように心に刺さる写真と、嫌でも当時を想像させるエピソードは、私に戦争の恐怖を教えてくれました。

今ここに、原子爆弾が投下されたら、私たちは一瞬にしてなくなります。

「でも、そんな非現実的なこと、起こるわけない。」

多くの人々がそう思っています。しかし、広島の人々も、その直前まで、原爆が投下されるなんて思ってもみなかったのです。家があること、家族がいること、学校へ行けること、生きていること。そんな「あたり前」を広島の人々は、たった一発の原子爆弾により、奪われました。

戦争の警鐘は、今もなお、鳴り続けています。私達は、原爆により亡くなった方々から平和な未来を託されました。世界で唯一の被爆国である日本。そして、世界で初めて原子爆弾が投下された町、広島。しかし、今の広島は、戦争があったとは思えないくらい、豊かで美しい町です。もし、人々が生きぬくことをあきらめてしまっていたら、今のこのかけがえのない広島はありません。私は心より、その人々への感謝と戦争の被害を受けた方々への哀悼の意を表します。もう二度と、戦争という過ちを繰り返さないために、私たちはこの地を守り、そして、その声を伝えていかなければなりません。戦争の悲しみと、苦しみと、怒りを語るこの声を。

# 広島と考える

名立中学校 3年 石橋 絢子

8月6日、それは私たちにとって、忘れてはならない日。人々の何気ない日常、笑顔、平穏な生活を奪った原子爆弾が世界で初めて広島に投下された日です。なぜ、罪のない人々が争いの犠牲にならなくてはいけなかったのか、自分には平和な世の中を創るために何ができるか、この気持ちと向き合う好機に私は2度も恵まれました。

1度目は、修学旅行で広島を訪れた時です。事前に、広島の歴史や戦時下の様子、原子爆弾による被害などを調べ、「わかったつもり」になっていました。しかし、実際にその場に立ってみると、得も言われぬ恐怖、そして深い悲しみが込み上げてきました。約70年前に、大きな打撃を受けた街が切々と語りかけてくるようでした。

そして、2度目が平和記念式典への参列でした。1945年8月6日、あの日と同じ快晴。雲一つない空の下で式典が始まりました。8時15分、平和の鐘が鳴りました。1分間の黙祷。目をつむると、戦争の恐ろしさが脳裏をよぎりました。一瞬の閃光ときのご雲。命を奪われた人々。焼け焦げた市街地。降りしきる黒い雨。

中でも印象に残ったのは、小学生の「平和への誓い」です。「広島の子どもの私たちが勇気を出し、心と心を繋ぐ架け橋を築いていきます。」

何と力強い言葉でしょう。小学生までもが平和について考え、伝えていこうとしていることに感動しました。

被爆から約70年が経過し、これまで被爆体験を次世代や世界に伝えてきた方々が高齢化し、年々少なくなっていくのは、紛れもない事実です。被爆の現状や平和への思いを確実に後世に伝えていくための取組を、今以上に推し進めていかなければなりません。

ヒロシマの願いである「核兵器廃絶と世界恒久平和」を実現するため、唯一の被爆国の民として、私はこの平和記念式典で学んだことを身近な人から伝えていきます。

## 日々

上越教育大学附属中学校 2年 奥泉 梅

原爆は、72年たった現在でも多くの人に様々な影響を与えています。

例えば、原子爆弾の影響による障害で苦しんでいる人、今でも大切な人を亡くし悲しんでいる人、恐ろしい原爆の記憶にうなされている人がいます。

戦争を知らない私たちの世代の中には「広島に原子爆弾が投下されたことがきっかけになって、人々の平和を願う心の礎になった」という人もいます。しかし、多くの人たちに悪い影響を与える原子爆弾が投下されなければ、苦しむ人たちは出なかったはずです。

今、私達若者に求められていることは、戦争について学ぶことだと思います。戦争を体験された方々の高齢化が進み、語り部が減っています。このまま戦争を知らない世代が増えていけば、また戦争が繰り返されるかもしれません。しかも、第二次世界大戦よりもずっと威力の増した兵器で。だからこそ、過去の出来事や過ちを伝えていくことが大切なのです。今回私が、広島派遣事業に参加した理由にはこのようなこともありました。

今回、広島を訪れ、「平和とは？」という問いに対して私が導き出した答えは、「感謝の気持ちを大切にすることです。この気持ちで世界中の人々が生活することができれば、平和は実現し、幸せに暮らすこともできると思います。

だから私は、自分が感じ、考えたことを、毎日実行していきます。つまり、「日々努力・日々反省・日々感謝」です。

附属中学校では、3月に行われる沖縄修学旅行に向けて、平和について考える機会が多くなります。友人や家族と共に考えを深め、真の平和の実現に向けて行動できる人になりたいと思います。



# 私たちの使命

直江津中等教育学校 2年 小林 永知

テレビや写真で何度も目にしたことのある原爆ドーム。しかし、実際近くに立ってみるとその圧倒的存在感と平和をうったえかける姿に衝撃を受けました。原爆ドームの周りにちらばったレンガや鉄骨のみになったドーム。これがたった一発の「リトルボーイ」の威力なのか…。原爆の被害がここまで酷いものだとは想像もつきませんでした。しかも、なんと実際に投下された「リトルボーイ」は、想定のおよそ五分の一の威力だったとのことでした。

平和記念資料館では、プロジェクションマッピングで原爆投下の瞬間を再現していました。まるで実際に原爆投下の瞬間に、タイムスリップをした様な感覚になりました。

一瞬にして失われた命、家族、家、故郷、あたりまえの日常…今の私達は自分の身にこんな事が起きるなんて想像出来るのでしょうか。

今もなお、世界では核兵器開発競争が行われています。地球上には1万5千発以上の核兵器が存在します。「核抑止論」が根強く信じられているようですが、核兵器が存在する以上、本当の平和は訪れません。

平和を願って燃え続ける「平和の灯」、「原爆の子の像」から感じた佐々木禎子さんの平和への願い、被爆者の方が語る戦争が終わった後も続く苦しみや悲しみ。その言葉の重み。これらは実際に広島を訪れなければ感じることは出来なかったと思います。

「あの日」から72年経った今、戦争を経験した人は減り、決して忘れ去られてはいけぬその事実は、次第に風化しつつあります。風化を防ぐためには、これからの社会を担う私たちが戦争による悲惨な被害を知り、決して他人事とは思わないことが大切なのです。

核兵器の存在するこの社会と向き合い、そして次の世代に戦争はあってはならないのだと伝えていくこと、それが私たちの使命です。



《 灯ろう流し（元安川） 》

# 非核平和友好都市宣言

私たちの上越市は、美しい自然のなかに歴史や文化の息づく、  
薫り高いまちです。この郷土を大切に守り、生きがいのある豊かな  
社会を築いていくことが、今の私たち市民に課せられた使命だと  
思います。

私たちは、これを根底からゆるがし、人類の平和と地球環境を  
脅かす核兵器の使用・実験は容認できません。世界唯一の被爆国  
の国民として、すべての国のあらゆる核兵器がすみやかに廃絶さ  
れ、恒久平和が確立されることを強く願うものです。

そのためにも私たちは、この上越市から姉妹都市や国際交流の  
輪を広げ、世界の人々と友好のきずなを強めながら、互いの繁栄を  
図っていきます。

私たちの上越市は、戦後50年の節目にあたり、平和を求める決  
意を新たにし、ここに「非核平和友好都市」とすることを宣言しま  
す。

平成7年12月20日

上越市